

愛郷
無限

土屋館
どや
だて 通信

発行者：大曲・花火通り商店街
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035
tuck-t@akita-tsujiya.jp

2015年10月2日号 NO.528

写真提供：大崎市

Subject：日本人が集団になったときの無責任さ

日本人は空気を読みたい民族です。そして読むと言うことは例え大勢が間違っているでも波風立てないように空気に流されやすい民族です。これは大昔から体制と生活の中で積み上げられてきたもの。司馬遼太郎も、丸山真男も鋭く厳しくこの点を指摘し、太平洋戦争を引き起こし、泥沼化していった要因の最たるものとして空気感を上げています。

彼らの言葉で語られた日本人が集団になった時の無責任さについてドヤツデーでも何度も書いてきました（私自身の自戒も込めて）。

責任を取らない、取らせない。

良い意味でも、悪い意味でも村意識。

ここ大曲でもとてもとてもよく見られることです。

「いーべ、いーべ」、「どうせ変わらないから今まで通り」、「こんなもんだべ」で全てがダラダラを進んでいく。

それでも、ステイクホルダーとパイが限られる小さな地域だけに、強い意志と継続があればそこには例え小さくてもブレイクスルーが起こることもあるでしょう。

しかし、さらに大きな国政という括りでは最近、無責任さのオンパレードではないでしょうか。しかもそこには必ずお金（利権・経済優先）の話が絡んでいるように見えます。

何が正解で、何が国体として正しいことなのか？

それは我々凡夫にはなかなか分からない。

でも、無責任だなということは子どもでもハッキリと分かります。

これを反面教師として、私達は公にかかわるとき、責任ある決定と継続を心がけていきたいものです。

悲しいではないか！

9月26日朝刊の天声人語と春秋を添付致します。

天声人語

戦前の日本は、どのようにして先の戦争に突入していったのか。政治学者の丸山真男は、敗戦直後に執筆した論文で喝破している。「何となく何物かに押されつつ、ずるずると」。これは驚くべき事態だ、と▼ナチスの指導者は開戦への決断をはっきり意識していたに違いない。しかし、日本では、我こそが戦争を起こしたという意識を持つ指導者がいない。日本では主体的な責任意識が成立するのは難しい——。丸山の苦い診断である▼「ずるずると」と形容すべき事態が今も繰り返されている。新国立競技場の旧計画が白紙撤回されるまでの経緯に関し、第三者委員会が報告書を出した。すべての重要な決定は、「やむをえない」という「空気」を醸成することで行われていた、というのだから驚く。ツケを払わされる納税者のことは眼中にないのだから▼整備主体の日本スポーツ振興センターも監督する文科省も、「誰も独自の決断をしてこなかった」。そうした中で報告書が「特に」と断って批判するのが、森喜朗元首相らの有識者会議だ▼本来は諮問機関にすぎないのに、各界の重鎮が並ぶせいから、「実質的な主導権や拒否権」を持ったと断じる。権限をふるうが、責任は負わない。そんな組織が意思決定の頂点にあれば、まさに丸山の言う「無責任の体系」が形作られてしまふ▼大会組織委員長でもある森氏は撤回前、3、4千億円かけてもいいと語っていた。それでも、おとがめなし。「ずるずる」体質は骨がらみなのか。

2015・9・26

春秋

「証文の出し遅れ」。よく使われるこの言葉は対応が手遅れになって効力を失うことをいうが、世の中には意図的な「証文の出し遅らせ」の術もあるようだ。ここぞというときには切り札を使わず、のらりくらり。あんまり意味がなくなっているから、そつと差し出す……。

▼この夏からつづく新国立競技場の問題をめぐり、下村博文文部科学相が安倍晋三首相に辞任を申し出たそとだ。建設計画を検証した文科省の委員会が、下村さんの責任にも言及した報告書をまとめた。それを受けた辞意らしいが、内閣改造まで残りわずかのタイミングだ。首相に慰留され、改造時に大臣を交代するという。

▼辞意は表明するもの、はっきりとした引責辞任はしない。はじめをつける形をとりつつ、実はさほど傷を受けないわけだ。辞めようというなら計画が白紙撤回されたときだったはずだが、あれから2カ月余。なかなかの「証文の出し遅らせ」というほかない。こんな具合で五輪の準備体制がきちんと立て直せるだろうか。

▼この騒ぎをめぐる辞任劇は今回が初めてではない。さきに文科省の担当局長は定例異動に合わせて退職し、日本スポーツ振興センター（JSC）の理事長は任期切れとともに退任する運びだ。どうにも曖昧、すっきりしないやり方ではないか。いやいや、組織委員会の森喜朗会長はどっしり構えて揺るぎない様子ではある。

2015. 9. 26